

大阪府河川整備審議会 令和6年度第2回治水専門部会 議事要旨

日 時 : 令和6年12月23日(月曜日) 16:00~17:03

場 所 : エル・おおさか 606号室

出席者 : (部会委員) 川池委員、小林委員、中北専門委員、中桐委員、堀専門委員

内 容

降雨分析の結果に基づく大阪府域河川における流量等の分析について

- ・ 気候変動の影響を踏まえた流量の変化についてご確認いただいた。
- ・ 部会から審議会への報告する答申(案)についてご確認いただいた。

概 要 : [以下、○委員 ●事務局]

降雨分析の結果に基づく大阪府域河川における流量等の分析について

- 4℃上昇時のシナリオの幅を考慮して2℃上昇時の降雨量変化倍率を設定することは重要である。
- 流域の大きい河川については、基本高水流量を設定するにあたり、将来的な気候変動に伴った降雨の空間パターンの変化についても確認いただきたい。また、計画降雨継続時間の変化についても確認いただきたい。
- 今後、個別流域で検討を進めていく中で、委員ご指摘の点についても確認する予定である。
- 流域にある田んぼ等の貯留施設の効果を定量的に算定したことは良い取組である。今後、計画高水流量の検討において、手戻りの無い治水対策を検討し、推進していくということによいか。
- 今回は簡易的に貯留施設の効果を算定している。不足する流量への対策については、個別流域での検討の際に河道や貯留施設、流域対応を含め、手戻りの無い手法にて検討していく。
- 大阪府域に絞って独自に降雨量変化倍率を算出することは良い取組である。また、今後、個別流域で田んぼダムなどの効果算定にあたり、様々な研究を参考にして検討を進めていただきたい。
- 今回、貯留施設の効果量については、全ての施設が100%活用出来るという理想的な状態になっている。田んぼダム等の効果を算定する手法はまだ研究途上の段階であるが、今回の手法は簡易に効果を算定できるという面で有効な手法である。今後、様々な研究者の手法を確認するとともに、取組の普及率をパラメータとして、検討するという手法も有効であると考えられる。
- ため池の効果量算定にあたっては、越流水深分を効果量として見込めるので、その点も整理すれば、ため池の効果をより精緻に求めることができると思われる。
- 降雨量変化倍率を算定するにあたり、雨域面積25km²、雨量積算時間24時間というような通常計画で見込まないようなものを含めて平均して倍率を算出しているが、それらを含めると危険側の倍率になっていないか。
- 雨域面積25、50km²、雨量積算時間1、2、3時間の降雨など雨域面積が小さいものや雨量積算時間が短いものについて、降雨量変化倍率を確認したところ、降雨量変化倍率は1.15倍に達していないため、危険側の評価にはなっていないものと考えている。
- それらの点を含め、判定されているということであれば承知した。

- 安威川の流量解析で用いている降雨波形は河道に対して非常に厳しいものである。今後個別流域で検討を深めるにあたり、他の降雨波形においても流量を確認する必要がある。
- 今回、安威川の流量算定で用いた S42.7 の降雨波形は河道に対して最も厳しい降雨波形であるが、委員ご指摘のとおり、安威川の計画には、ダムの貯留量算定など様々な降雨波形を用いて検討を行っている。今後、個別流域の検討にあたっては、委員ご指摘の波形も含め、様々な降雨波形を用いて流量の確認を行う。

- 答申（案）（2）②について、将来的に気温が上昇すると降雨量が増大する可能性があるという意味合いを持たせてはどうか。また、降雨量変化倍率を 1.15 倍と記載するのか。
- ご指摘のとおり、修文させていただく。また、降雨量変化倍率については、2℃上昇時の平均値ということで、今後の個別流域で検討の基準とするため、記載させていただく。